

6

草野竹史さん・東輝さん



草野竹史 (NPO法人 ezorock 代表理事)

東輝 (NPO法人 ezorock 総務担当)

2001年、ロックフェスティバルの環境対策ボランティア団体としてezorockを設立。2013年に法人化。SIAFには2019年からボランティアのコーディネート事務局として関わる。SIAF2024では「ふむふむプロジェクト」として、ふむふむサポーター・ふむふむガイドの運営事務局を立ち上げ運営。

トーク内容

- ・ 市民参加を意識して、ボランティアの役割をはっきり位置づけている SIAF
- ・ 現代アートは関係ない分野だと思っていたが、多くの共通点を見出した2019
- ・ コンスタントに活動希望者が集まり続けることは想像していなかった
- ・ ガッツリ研修があるふむふむガイドの希望者が多かったことへの驚き
- ・ ふむふむサポーターは「作り手」としてお祭りに参加できる隙間



インタビュー全編はYouTubeでご覧いただけます。

<https://youtu.be/oGmoHzX3Pm4>



Q SIAFに関わり始めたのはどういうきっかけでしたか？

草野：SIAFのことは初回から知っていました。理由として、初回からボランティアを導入したいという話はいただいていたからなのですが、そもそも夏はロックフェスの現場が忙しかったのでお断りしていました。その後、冬開催になるあたりで改めてお声がけいただきました。ボランティアの参加の仕組みをつくることは確かに好きなのですが、アートが全然わからなかったので、一番最初に話し始めた2019年ごろに、事務局の方に「現代アートって何なんですか？」っていうのを2時間くらい質問し続ける日があったんです。

一緒にやらせてもらいたいんですけど、「なにを大事にしているんですか？」とか「どういうところに意味があるんですか？」ということが理解できないと絶対無理だな、と思ったので。それに対してもうひたすら打ち返していただいて、「あ、実は現代アートと自分たちがやっていることってそんなに遠くないんだ」と接点や共通点がいっぱい見えてきました。

そこから、この大きな動きに自分たちが参加させていただけることを、むしろ大事にしたいと感じて、団体の中でも価値観が変わっていきました。関わり始めた初期の頃に、そのあたりをしっかりお話する機会を設けていただいたことはとても大きかったですね。

Q SIAFのボランティア活動を運営する中で、 どういことを大切にしていましたか？

東：基本的にezorockのボランティアは10～30代くらいの方が中心なのですが、「いろいろな方とにかく参加していただきたい」ということで、SIAFではもうちょっと年配の方、50代から70代くらいまで年代を広げました。説明会をオンラインで実施したのですが、どうしてもオンライン環境がない方もいらっしゃったので、ezorockの事務所で説明会に参加していただいて対応しました。

ボランティアで参加する方はいろいろな目的で来られているので、「いろいろな価値観が混ざる」というところはSIAFのボランティアも普段のezorockの活動と同じでした。その価値観の幅が普段の活動よりは割と広く、そして年齢層も普段より幅がある、というのは大きな違いでした。

草野：SIAFのボランティアは「アートが好きそうな方々」が多くなるのかと思いきや、蓋を開けてみると、集まっている人たちが幅広くて、雰囲気や会話の内容、価値観が非常に多様でした。そこで作品を通して、ボランティア同士でお互いの価値観を重ね合わせるような機会が生まれていました。価値観の幅広さによって、他の人と交流する楽しさが色濃く出たんじやないかなと思いますね。
